

人文科学分野のシソーラス : Art and Architecture Thesaurus の成立過程とその内容 A Thesaurus in the Humanities: The Formation and Substance of the Art and Architecture Thesaurus

宮 崎 幹 子 *

Motoko Miyazaki

Abstract

This article reviews the Art and Architecture Thesaurus (AAT). In particular, the author focuses on its characteristics of the formation and substance in detail.

The author surveys the evolution of thesaurus standards, and the changes of definition of thesauri. These issues are important for much deeper understanding of thesauri as controlled vocabularies organized that the relationships between concepts can be made explicit. In functional aspects, thesauri are regarded as tools used to translate natural languages into controlled vocabularies. In this article, the author adopts the following point of view on functions which thesauri perform in the process of indexing and retrieval: "conceptual representability" as one of the important properties of thesauri.

In the field of art, the following issues that prevent the subject access are raised: the extent of its scope, the ambiguity of terminology, and the diversity of items to be indexed. These issues are unique in this field in preventing the subject access. The increasing amount of information, the expansion of indexing and abstracting services, and the extensive use of computers in museums, and all of these factors had influenced on the move toward the construction of new thesaurus.

AAT is made to be usable in diverse institutions from the beginning and designed to provide the connection between items. The reason behind this is the variety of items used in the study of art. As its policy, AAT tries to keep relationships between other vocabularies because one of the goals is to maximize its relevance and to enable to adopt it to organizations that have records with other vocabularies.

AAT strictly pursues the accuracy and reliability of the form of terms and meanings. It is because the ambiguities of terminologies in this field and dealing with this problem are the most important goal of this thesaurus. As a result, AAT also functions as a kind of dictionary or glossary with many scope notes. AAT is organized by facets that are arranged systematically to proceed from abstract concepts to concrete objects. Not only do they reflect the conceptual structure in this field, but also these facets and arrangements serve as a point of view when items are analyzed and indexed.

Studying thesauri with respect to its conceptual representability, AAT is considered to have the function because AAT provides many scope notes and has elaborated structure.

宮崎幹子* : 奈良国立博物館 仏教美術資料研究センター

JOURNAL OF LIBRARY AND INFORMATION SCIENCE. Vol. 10, p. 15-42 (March 1997)

1. はじめに

自然科学, 科学技術分野を中心にいわれてきた「情報の爆発」と情報要求の複雑化は, 人文科学系の学問分野においても例外ではなく, 多くの情報提供機関はこうした状況への対応に迫られている。それに加えて情報技術の進展は, 図書館以外の様々な組織においても, 新たな情報提供のあり方を認識させるに至った。こうした背景のもとに美術分野では, 1990年に *Art and Architecture Thesaurus* 第1版が, 1994年には第2版と *Guide to Indexing and Cataloging with the Art and Architecture Thesaurus* が出版された。人文科学分野全般において主題情報へのアプローチは今日的な課題となっており, 新しく誕生したシソーラスは, 今後, 他のシソーラスを考えるにあたってなんらかの示唆を与えるものと思われる。また, 主題アクセスをめぐる環境が変化するなかで, 従来のシソーラスに対する考え方を見直すことも必要であろう。こうした意識から, 本研究ではこれまでにない分野のシソーラスとして *Art and Architecture Thesaurus* を取り上げ, 同時にその際の視点についても検討を行うこととしたい。シソーラスを取り上げる場合には, 一般に索引作業から検索までの一連の過程において利用し, 評価が行われるが, その際にはシソーラス以外の様々な要因が影響する。新しいシソーラスには, それ自体にこれまでにない要素があるものと考えられる。従って本研究では, シソーラスの開発に関連した諸要素を整理し, その特質を成立と内容の両面から見いだすことにする。尚, このシソーラスは電子媒体でも出版されているが, 本研究で取り上げるのは冊子体のみとする。

2. シソーラスの機能の検討

2.1 シソーラスを捉える際の視点

ここでは, 今日のシソーラスの定義や求められる要件はこれまでのシソーラス作成の進展の過程で確立されたものと考え, 研究を進める上

でのシソーラスに対する視点を見いだすために, これまでの定義, 記述を概観し, 整理をおこなう。

Lancaster はシソーラス発展の過程をガイドラインおよび基準の変遷を辿ることによって跡づけている [01]。つまり, ガイドラインや基準はシソーラス構築における経験を集約し, 記録, 成文化することにより確立されたもので, これらの影響関係を流れの中に位置付けることによって, シソーラス発展の過程を描くことができるかと解釈したのである。それに従えば, ISO (International Organization for Standardization) のガイドラインが現在のシソーラスのあり方を考える上での一つの到達点と見ることができる。そこでの定義は“(例えば上位, 下位といった)概念間の先験的な関係を明示させるために形式的に組織化された, コントロールされた索引言語の語彙である” [02] となっている。神門らは, 国際的なガイドラインにおけるシソーラスの定義を比較したが [03], ここで定義の変遷を辿ってみると, 最初の国際的なガイドラインである UNESCO のガイドライン (1973) は ISO 2788-1974によって継承され, そこではシソーラスの機能を, “自然語を制約されたシステム言語に翻訳するのに用いられるデバイス” [04] とし, 統制機能を強調したかたちで定義がなされている。それに対し, British Standard (1979) では“統制された索引語彙中の用語を, その用語の先験的な関係を示すものと一緒に表示する手段” [05] と定義され, 更に UNISIST (United Nations World Science Information System) のガイドライン第2版 (1981) と, 1986年の ISO のガイドラインでは, “統制された索引言語の語彙であり, あらかじめ概念の先験的な関係を明示するように組織化されているもの” [02] [06] となっている。また, 定義の変化にともなって概念間の関係に関する記述が詳しくなっているが [03], これは, 単なる同義語の統制リストから, 概念の意味的な関係をより組織的な構造をもって示す点に定義の中心が移ってい

たことを意味する。つまり、同義語と見なす用語の統制を機械的に達成するという当初の見方から、概念間の関係を明らかにし、体系化を図るという機能が強調されるに至ったのである。神門らはこうした定義の変遷を踏まえて、シソーラスを用語を統制するツールというよりも概念間の関係を明示して定義し、知識を体系化し、それを表現するものであるとする立場をとっている [03]。

学術コミュニケーションにおいて専門用語が重要であることはいうまでもないが、用語の理解を促す基本的なツールである専門用語辞書には、専門分野の概念体系を反映し、領域に特有な関係を持つ用語の理解を促すために、単に単語が表す概念そのものを定義するだけでなく、用語を取り巻く体系を示す [07] という機能が求められる。このことを考えると、言葉によって主題を表現するシソーラスに専門分野の知識体系の反映が求められるのは当然のことであろう。

概念体系を示すものとしてのシソーラスは今日のガイドラインにも現れている。しかし、シソーラスの関わる範囲は、情報の蓄積から検索のプロセスの中で、文献から主題分析によって抽出された概念をコントロールされた語彙へと翻訳するためのツール、また逆から見れば、検索質問の分析から抽出された概念をコントロールされた語彙へと翻訳するためのツール、と見なされるのが一般的である [01]。例えば、“ドキュメントに用いられている自然語、索引者および利用者の用いている自然語から、より統制のとれたシステム言語へ翻訳する際に用いられる用語コントロール用の工夫” [06] という定義にあるように、全体として自然語—翻訳—統制語という構図のなかでシソーラスを捉え、コントロールするという考えを、統制語への翻訳という機能に限定しているように見受けられる。

こうした考え方に対して岸田らは、ある一つの概念体系、概念形式を提示することによって

索引する側と検索する側との概念の把握形式を一致させる必要性を説き、従来の翻訳機能を重視した捉え方では、シソーラスは翻訳より前の段階である主題概念の分析と抽出にはなんら関与し得ない [08] とした。そして、その様な問題意識から、主題分析の結果から得られた概念をコントロールされた語彙へ翻訳するツールとする従来の見方を反省し、シソーラスの役割を、索引する側と検索する側との概念の捉え方を一致させるために、一つの概念体系を提示するもの [08] とした。主題概念の抽出過程は、コントロールされた語彙への翻訳過程から独立して行われるのではなく、一つの枠組みの中で相互依存的に行われる。従ってシソーラスを両者の間の主題概念を捉える際の補助的なツールとして考え、概念あるいは言葉の意味にたいして一つの視点を与えて、概念の捉え方なるべく一意に決めることがシソーラスの果たす一つの役割と考えるのである。その様な機能をシソーラスが満たすために、岸田らは概念体系をいかに示しているかを評価する要件を提示したが、その要件とは、主にスコープ・ノートの詳しさと、階層構造の理解のしやすさである。

同義語の統制という機能に焦点を当てた場合には、シソーラスの役割は従来の定義にあるように、索引と検索の間を結ぶ最終的な翻訳のツール、と考えていいだろう。しかしながら、本研究では、シソーラスの意義は、索引作業と情報検索において利用できる共通の枠組み、あるいは観点と、言語を提供することにあり、シソーラスの機能はより広い範囲で関与するものではないかと考える。従って、同義語の統制はシソーラスの機能の一部であると考え、シソーラスを取り上げる際の基本的な立場として、岸田らの「概念体系を提示するもの」という見解を援用することにした。その理由は、(1)本研究で取り上げるシソーラスは現在までの発展過程の上に位置付けられること、(2)概念体系を提示するための要件とされている概念の定義が、本研究で取り上げるシソーラスにおいて重要な要素と

なっている点、そして、(3)シソーラスの構造自体が索引作業において一つの観点を与える機能をもつと考えられる点である。

2.2 シソーラスの位置付け

以上のような考え方は、シソーラスというツールを概念的に捉え方たものである。しかし、シソーラスに関わる可能性のある領域には近年変化が見られ、そうした中でシソーラスの位置づけを改めて考えることは必要である。例えばオンライン情報検索やオンライン目録といった環境において、分類法、件名目録法、主題索引法の関係は極めて密接なものになり、最近では主題アクセスあるいは主題分析といった名称で一括して論じられているが[09]、シソーラスは件名標目表と共に、主題アクセスを可能にする方策の一つとして位置付けられる。また、シソーラスを更に広い観点から眺めて書誌コントロールという枠組みで論じられる領域の一部とみなすこともできる。書誌コントロールという言葉には、“文献入手という目的を達成するための最大効率の手段を追求する”[10]という意味が込められているが、シソーラスが情報資料への主題アクセスを利用者に提供し、それを効率的に達成する手段であることはいうまでもない。丸山らは図書館だけでなく書誌、索引、抄録の機能をシステムティックに書誌コントロールとしてとらえる視点を提示したが[10][11]、ここでは書誌コントロールと主題による組織法の関連は極めて密接なものとされている。オンライン目録、書誌データベースの発展により主題アクセスに関しては目録と索引の問題領域は急速に接近し、またその境界線もあいまいなものになりつつあるが[11]、このような位置付けは、本研究で取り上げるシソーラスが *Library of Congress Subject Headings* (LCSH) の選択肢の一つとして受け入れられたり、また従来文献という言葉で示されてきた枠組みをこえて、広く求める情報資料への知的アクセスを可能に

しようとする試みが進展した状況[12]を考えても示唆のあるものといえよう。

一方、書誌コントロールを更に拡張させて、理論構成のための枠組みという意味での一つの方法論的概念と捕らえる見方も存在する。そのような“文献とその利用者とを媒介する徹底的な場を書誌コントロールととらえ、非常に厳密考察を加えた”[10]ものとして、Patric Wilson の *Two Kinds of Power* がある[13]。1990年38巻4号の *Library Trends* は、Intellectual Access to Graphic Information と題する特集を組み、そこで本稿で取り上げるシソーラスの開発の経緯が述べられたが、同号の序論で Wilson による著作が取り上げられたのは決して偶然ではないだろう。それによると、この特集は Wilson によって例示されている対象のコントロールについて議論するものではないが、対象が違うことは Wilson の哲学的な詳説の基盤に変更を与えるものではなく、広義の書誌において技術的な側面は変化したけれども、その根底にある意義は同じである[14]。このような意味での書誌コントロールの構成枠組みを、根本は図書館、書誌サービスを意味する単位レベルと、広義の書誌システムといった複合レベルに分けて示したが[15]本研究で取り上げるシソーラスを広義の概念としての書誌コントロールという枠組みと共に論じることが、それが抄録・索引サービス、図書館、博物館、美術館という単位レベルだけでなく書誌ユーティリティを介した複合レベルにおいても利用されるコントロール手段であることを考えると、有効である。

3. 美術分野における主題アクセス

3.1 主題アクセスに関わる問題

主題アクセスとは、利用者がある主題について情報を得るために、その主題について書かれている文献の存在を知り、その文献を入手することであり、そのために情報提供システムには特定の索引言語システムが組み込まれている

[16]。ここではシソーラスの対象とする美術という分野に特有の問題点を整理する。

3.1.1 範囲に関わる問題

シソーラスの作成に際しては対象とする分野の範囲の決定が重要となるが、美術とは非常に捕らえにくい概念で、辞典類における定義も一様ではない。

新潮世界美術辞典によると、美術（art）とは、“絵画、彫刻、建築、工芸などの総称であるが、絵画と彫刻の再現芸術に限られる場合もある。西欧では芸術と美術の二つの言葉を使い分けず、アートやクンストを広義に使う”[17]となっている。芸術では、“絵画、彫刻、建築、詩、音楽、舞踏などの総称であり、一般に美的価値をもった客観的对象を創作する人間の活動およびその所産をいう”[17]となっているが、英語では同様のartを用いている。語と概念の成立という点から見ると、18世紀に至って「美的技術」（beaux-arts、仏、schöne Kunst、独、fine art、英）を他の実利的な技術と区別した後、単にartと省略する傾向にあるが、同時に“絵画、彫刻などのいわゆる造形芸術を指す場合が多い”[17]ともされ、先のような狭義のartと、より広義の概念の省略形であるartがあることが分かる。

一方、LCSHでは、Artsを視覚芸術、文学、パフォーマンス・アーツを含むもの、Artを視覚芸術とし、ArtをArtsの下位概念であるとみなしている。またFine Artsは件名として採用せず、Arts、Art両者にUSE（を見よ）参照を示している[18]。

以上のように、美術、芸術およびart、fine artsなどにおいて、その範囲を厳密に定義するのは困難である。しかし上述の定義と、美術を研究対象とする美術史という研究分野が、伝統的に建築、彫刻、絵画、工芸から構成されているという事実[19]を踏まえ、美術の範囲を絵画、彫刻、建築、工芸を含む英語という狭義

のartに相当するもので、最も狭義には、絵画、彫刻を指す場合もあると理解することができる。

続いて、これらを対象とする学問分野で用いる研究方法を時代的変遷と共に追っていくと、近年の学問分野全般に共通する傾向、すなわち学際的な研究と共に分野の研究手法および対象が拡張する動きが見て取れる。まず、学問としての厳密さを確立させ、方法論的、論理的基盤ともなったのが、様式史的研究と呼ばれるものである。これに対し、19世紀のキリスト教考古学と共に発展した、作品自体のもつ意味内容を明らかにしようとする図像学的研究や、様式とか主題の意味を時代の精神的背景と結びつけようと試みた精神史的研究などがあった[19]。第二次大戦後には、図像学的研究を拡張させて、広く人文諸科学、文化社会全体の中で追求するイコノロジー的研究が現れ、またこれと並行する構造分析的研究と呼ばれるものもある。更にはゲシュタルト心理学、精神分析を援用する心理学的方法、時代を超えて共通する精神の歴史的跡付けを行う研究などが現れた[19]。そして1960年代末から顕在化した研究における全体的な見直しの動きがあり[20]、これまでの手法に対する突破口として盛んなのは社会学的、歴史的アプローチであるとされる。Kleinbauerらは美術史の領域を示した中で、心理学、社会学的研究を独立した章として扱っており[21]、新しい動向には記号論、意味論、経済学、フェミニズムといったアプローチも見られる。

以上のような、主題分野の範囲が掴みにくいという点、研究に用いる観点が近年富に多様性を増しているという点は、研究成果とそれに対する情報要求にも当然反映してくる。資料を収集しそれに対してアクセスポイントを用意する場合、その行為自らは主題分野の範囲を規定するものではないが、アクセスポイントの設定という極めて現実的な問題を前にした場合には、どこまでをその範囲として反映させ、どの程度の詳しさを実現させるかについては慎重な検討を要する。

3. 1. 2 用語に関わる問題

人文科学分野における二次的な情報サービスは科学分野と比較して立ち遅れており、その要因として語彙と意味における異質さ、つまり用語の範囲や用法が曖昧な点が指摘される [22]。その一方で、人文科学の研究では記述という行為が中心となっている面があり、言葉のもつ意味はそれだけ重要である。美術分野に限れば、用語に関して混乱と使用法の曖昧さを回避するためにコントロール手段を講じる必要のあるものとして以下のような種類があげられている。

(1)曖昧な用語 (例: Miniature, Symbolism) (2)部分的に重複する用語 (例: Ethnic; Vernacular; Primitive; Native; Folk) (3)時代区分 (4)地理的な名称 (5)文明と文化 (例: Greek, Viking, Islamic, Banin) (6)様式, 運動, グループ (例: International Gothic, Caravaggisti, Barbizon) (7)作家, 作品, 記念物の名称 [23]

更に、専門用語と一般的な用語、歴史的用語と現代的用語等を対立する問題としてあげる者もある [24]。こうした例を見ただけでもこの分野の用語がいかに複雑であるかがわかる。特に用語の範囲や変遷を考慮するということは歴史的観点から研究を行う分野においては大きな問題となる。

3. 1. 3 資料に関わる問題

美術分野では、研究は第一に作品に基づいて行われるというが、研究が作品との対話だけに終始するわけではなく、一口に研究資料といっても多種多様である。更に、利用者にとってどれが重要であるかは場合によって異なり、専ら最新情報への要求が高い自然科学、科学技術分野との違いが認められる。例えば、様々な立場から生産された研究文献はもちろんのこと、研究対象に直接的に付随する記録類などの第一次的資料があり、写真や複製なども重要な資料であるとされる。こうした人文科学系の研究資料

の内容、形態に渡る複雑さを詳細に区別する枠組みで、共通理解を得たものを見つけることは困難であるが、L. S. Jones [25] の設けた項目を参考にして美術分野で用いる研究資料とすると、(1)単行書 (2)集成, カタログ・レゾネ (3)記念論文集 (4)学位論文 (5)会議資料 (6)学術雑誌 (7)新聞, 一般誌 (8)博物館, 美術館出版物 (逐次刊行物, 展覧会カタログなど) (9)売り立て記録 (オークション・カタログなど) (10)アーカイヴ資料 (11)バーチカル・ファイル, スクラップブック (12)ドキュメント (批評, インタビューなど) (13)視覚資料 (スライド, ヴィデオテープ, ピクチャー・コレクションなど)といったものがあげられる。更に、マイクロ資料, アーティストブック, 稀覯書, 模型などが含まれる場合もある。こうした分け方は厳密に資料の形態, 内容によるというより便宜的なものであるが, このような多様性が様々なレベルでの資料へのアクセスを困難にしている大きな要因と考えられる。そして重要なことは, これらが作品と共に, 文献, その他の資料といった枠組みを越えて利用者に必要とされる点であろう。

美術分野で望まれる主題アクセストゥールには, こうした資料に対して利用できることが求められるが, 文献以外の写真, スライドなどのいわゆる視覚資料とオリジナルな作品へのアクセスについては語彙だけでなく索引法の確立も課題となっている。特にこうした言語を伴わない資料については, 語彙の構成と索引法は明確に分けることは困難である。なぜなら, その様な資料を記述するための語彙は, 分析するレベルを考慮することが必要だからである。例えば, 文献とそうでない資料を対象とする場合の違いは次のようにも比較できる。文献やファイルを対象とした索引は, その内容である概念, 事項, 語句などが容易に探せるようにそれらを項目として抽出して系統的な排列に整えたもので, それぞれの所在箇所への導きとなるリスト [26] であるが, 視覚資料, 作品においてなにかを項目として抽出するには, 視覚的に表現された明

確でない概念の推定と総合が要求される。その意味で作品の索引は学術的見解、解釈などに基づく外的なものである [22]。

しかし、こうした文献との本質的な違いを認識しながらもあるレベルを設定し、特に絵画の分析のための枠組みを確立しようとする試みもある。守田らは、絵画を対象として既存の3つの索引法の比較検討を行った [27]。守田らを用いたのは、図像解釈のモデルを実体関係属性モデルとコロン分類法に援用したものと、シソーラスを用いたものである。結果として、実体関係属性モデルを応用したのものとシソーラスを用いたものを評価しているが、どれが最も優れているかという結論は導きだせないとしている。これらの方法はいわば試行段階といえるもので、多様な資料と利用者の要求に対応できるもので確立されたものはあまりないといっている。

3.2 主題アクセスのツール

ここでは美術分野の主題アクセスの現状を、LCSH、特定の領域を扱う分類システム、そして文献ガイドでリストされているレファレンスブックの項目を手掛かりに見ていくことにする。

3.2.1 Library of Congress Subject Headings

LCSH は1897年の初版以来改訂を重ね、1994年には第17版が出版されている。LCSH では、Arts を視覚芸術、文学、パフォーマンス・アーツを含むもの、Art を視覚芸術とし、Art を Arts の下位概念であるとみなしている。従って、ここで問題としている美術の範囲としては、Art に関連する標目が相当すると考えられる。Art の下位区分として(1)1400年以前に生存した人名、(2)神、伝説的人物の名前、(3)トピック、といった標目をあげ、トピックや場所による下位区分を作成することも可能であるとしている [18]。Art に関連する件名標目については北米美術図

書館協会 (Art Library Society of North America: ARLIS/NA) によって検討が加えられているので [23]、分野の動向が反映されるものと考えられる。また、*Art Index, International Repertory of the Literature of Art, Avery Index to Architectural Periodicals* といった二次資料は主題索引にLCSHを増補させて利用していた [28]。LCSH は知識の全分野を対象としているので、こうした応用は考えられるが、特定分野の主題を表現するには自ずと限界があり、新しい研究動向を反映させた件名標目を逐次導入するのも困難である。また、LCSH は当然ながら文献を対象としたものであるので、分野全体の様々な資料に対して用いるには困難であろう。

3.2.2 ICONCLASS

美術分野の図像学的内容を扱う二次資料に *Marburger Index* がある。二次資料といってもこれは文献を対象にしたものではなく、中世から現代までの西洋および非西洋美術の写真コレクションで、マイクロフィッシュで提供されている [25]。美術分野にはこうした資料がいくつか存在するが、その多くで主題索引として利用されているのが *ICONCLASS* である。*ICONCLASS* とは、図像学的な観点に基づく一種の分類システムで、ライデン大学の H. van de Waal によって開発され、L. D. Couprie によって完成、編集されたものである。このシステムは、全体を (1)Religion and Magic (2)Nature (3)Human Being, Man in General (4)Society, Civilization, Culture (5)Abstract Ideas and Concepts (6)History (7)Bible (8)Literature (9)Classical Mythology and Ancient History [25] といった9つのクラスに区分し、図像学的見地からの検索を可能にしている。Jones は、*Marburger Index* のような資料の利用者でなくてもこのシステムについて理解すべきであるとしているが、その理由は、冊子体の *ICONCLASS* は分類表

であると共に、各区分に関連する書誌が付いているためである。ここに、美術という分野が形態を越えて特定の主題の資料を求める、ということがよく現れている。図像学においてこうした主題アクセストゥールが開発されたのは、それが知識の全分野を対象とした分類表では分散されてしまうような領域からなるということと、スライドなどの視覚資料への主題アクセスの手段が早くから求められたためであろう。ただし、*ICONCLASS*は図像学の研究に基づいたものであるため、分野の中では一領域の観点を反映したトゥールとして機能するに留まるものである。

3.2.3 専門分野の辞書、事典

M. Pointon は美術史研究において必要とされるレファレンスブックを用途によって二つのタイプに分けている [29]。

(1) 名前のあがっているアーティストについての伝記的情報。これは、美術家事典の類である。

(2) 選別されたアーティスト、技法、遺跡、よく使われる専門用語、重要な地名などに関する情報。これには、専門事典、専門用語辞典、便覧の類が含まれる。

(1)において人名からの検索が行われるのは明らかである。この手の事典で包括的なものに K. G. Saur 社の事典があり、最終的には50万項目全60巻を目指すという [30]。こうした事典の編纂が可能なのは、これまでに人物をテーマに据えた研究の蓄積がかなりの数にのぼることを意味する。このように人物自体が研究対象になることを考えると、様々な資料に対して人名によるアクセスが頻繁に要求されると想像できる。

(2)の専門事典には、人名以外に地名に関することがらが記述されていることが多い。歴史的研究はその性格上、地域や場所と密接に結びついているため、地名は重要なアクセスポイントとなる。また、専門分野の包括的な百科事典である McGraw-Hill 社の事典には、主なもの

けでも、作家、流派、図像学的テーマ、技法、概念、時代、地域などについての項目が含まれるとされる [31]。その他にも対象を限定した専門用語辞典は数多く存在する。例えば、素材、技法に関する側面を扱ったもの、絵画、建築など研究対象を限定したもの、地域、時代を限定したもの、また様式だけを対象とする用語辞典などがある [25]。更に、専門用語辞典には、図像学に関するものや西洋美術史との関連の深い宗教関係のものも含まれる。

以上、美術分野の研究で議論の対象となっていることがらを、件名標目表、分類システム、レファレンスブックを材料に概観してみたが、それが如何に多岐に渡るものであるかは容易に想像することができる。これまで、美術分野には先にあげたような資料を対象とし、かつ分野全体をカバーした主題アクセストゥールはなく、こうした状況のもとで主題アクセストゥールが望まれていたわけである。

4. 情報環境の変化と Art and Architecture Thesaurus の成立

4.1 情報環境をめぐる変化

Art and Architecture Thesaurus (以下AATとする)の開発が進んだ全般的な背景には、情報技術の進展、書誌ユーティリティの出現、オンライン・データベースの増加などがあるが、シソーラス開発への直接的契機となった要素は次の4点にまとめることができる。

4.1.1 文献の増加

情報量の増大は、第二次大戦後に注目されるようになり、D. J. de Solla Price は科学情報に顕著なそうした傾向を測定する尺度として学術雑誌の増加を用いたが [32]、人文科学系の学問分野においてもそうした傾向は例外ではない。美術分野では、代表的な文献ガイドとして定評のある *Guide to Art Reference Books* が、

1959年の時点で主要な雑誌149タイトルを採択しているが [33], その改訂版と見なされる1980年の *Guide to the Literature of Art History* では356タイトルに増加している [34]。雑誌以外にも, 人文科学分野全般で主要な研究資料である図書などの非逐次刊行物の増加は確実であろう。先のガイドでは, 1980年の改訂版が収録対象を1959年以降に刊行された資料を中心に据えたにも拘わらず, 全体の記入は2565から4037に増加している。また, それと双璧をなすガイドである *Fine Arts: A Bibliographic Guide to Basic Reference Works, Histories, and Handbooks* は3版を重ねているが, 全体の記入は第1版から第3版まで1675, 1822, 2051と増加の途を辿っている [35]。これらの収録対象のうち, 特に書誌の増加から一次的な資料とそれに対する情報要求の増大を知ることができよう。更に, 次々と開催される展覧会に伴って刊行される展覧会カタログその他の灰色文献の資料の増加も見逃せない。以上のような, 文献の増加とそれに伴う変化について, “情報の爆発と採算に縛られて網羅性を放棄してしまったかに見えるいくつかの書誌, 緊急かつ複雑で高度に専門的な利用者からのニーズ, 書誌学という秘儀を前にして導き手のないままに途方に暮れる利用者たち” [36] といった状況が報告されている。これらは, 個人の能力や伝統的な二次資料に拠っても, 文献の増加への対応が困難である現実を示すものである。

4. 1. 2 書誌, 抄録・索引誌の新たな展開

米国では, 美術分野の代表的索引誌として *Art Index* (1929-) が長い伝統を保っているが, 1991年以降この分野の抄録・索引誌は新たな展開を迎えた。*Art Index* と並んで近年欠かせない資料に *International Repertory of the Literature of Art* (RILA) があったが, それが1910年より続いていたフランスの *Répertoire d'Art et d'Archéologie* (RAA) との合併によっ

て1991年に *Bibliography of the History of Art* (BHA) として新たな出発をむかえることとなった。これにより収録誌数4000を予定する [36] 書誌が誕生したわけである。

文献の増加への対応策として19世紀末以来, 様々な二次資料が刊行され, 情報技術の進展に伴って1960年代後半から70年代の初頭にはオンライン検索が台頭したが, この時期はRILAが創刊された頃でもあった。人文科学分野では, 二次資料間の協力, 書誌情報関係の基準の制定などに関する活動は十分でないといわれるが [37], RAA と RILA の合併は美術分野の書誌情報の国際的な流通と, 協力体制実現のための前進と捕らえることができよう。そして未整備であったRILAの主題索引は, シソーラスの情報源として密接な関わりをもって発達したのである。

4. 1. 3 オンライン目録の普及

BHAのような広範囲に渡る探索ツールがある一方で, 多くの人文科学系の研究者にとって抄録・索引誌は他分野ほど馴染みのあるものではない [38]。その理由には, 人文科学系研究者の文献探索方法としてブラウジングが専ら定着している点, また, 研究方法が網羅的な探索やカレントな情報の入手などとあまり結びつかず, 情報源としてより選択的, 批評的な二次資料を求めるといった点もあるだろう。このような研究者が主として利用する資料は図書であり, その意味では人文科学系研究者は図書館の蔵書を最も良く利用し, 図書館は重要な情報源となっている [38]。そうした利用者にとっては, 目録は重要な情報源となるのではなかろうか。

従来, 図書館の目録が効果的に利用されていない, という指摘があったが, それは主題からの検索ができるように機能していないからであり, 大半は直接書架に行くことによって求める主題の図書を探していた, とする分析がある [39]。オンライン目録では主題検索の比率が増加する

ことは既に指摘されているとおりであり、主題検索が特定名からの検索を凌駕するとの結果もある [40]。先の分析では、カード目録では直接書架に向かった主題検索者が、オンライン目録になって目録にかえてきていると示している [39]。オンライン目録への移行は既にかなり進んでおり、ネットワーク上に目録を公開する図書館が今後も増加すると考えると、その情報源としての価値は見逃せない。しかしながら、オンライン目録では主題からの検索の可能な件名標目を持つレコードは非常に少なく、また、仮に持っていたとしても、それは文献の内容や利用者の情報要求を表現するのに十分なものとはなっていない。オンライン目録が今後とも人文科学系の利用者の貴重な情報源となることを考えると、これは大きな問題であろう。実際、主題アクセスのためのツールを最も必要としていた組織の一つは美術図書館だったのである。

4.1.4 博物館、美術館等へのコンピュータの導入

美術分野では文献以外にも様々な形態、内容の資料が利用される。そのような資料を扱う組織には、博物館、美術館、アーカイヴなどがあるが、そこでの資料は様々な目的のもとに範囲を定め記述されてきた。それには例えば、インベントリーやカタログ・レゾネ、売り立て目録などがあるが、それらの目的とするのは資料の物理的な管理や、それ自体一つの研究成果でもあったりする。つまりそれらは、なんらかの情報要求をもった利用者が利用するために知的アクセスを保証する目的で体系的に資料化された書誌や索引と同様に論じられることは少なく、また、様々な形態、内容の資料がそのような意味での記録の対象とはならないことが多かった。しかし、図書館だけでなく博物館、美術館といった第一次的な資料を所蔵する機関へのコンピュータの導入により、それらが二次的な資料を作成する対象として認識されるようになり、また情

報の共有という考え方に対して概して排他的であった研究者間にも意識の改革が迫られるようになった [41]。そのような状況から、従来の文献という枠組みに留まらない資料においても情報とは何か、ということが根本から問われるに至ったのである。美術分野の情報をめぐる問題は、主に図書館の領域として扱われてきた。しかし、近年そのことについて活発に議論がなされるようになったのは、「コンピュータ化」という文脈においてである [42]。

4.2 Art and Architecture Thesaurus の沿革

ここでは、シソーラスの発案された当時の状況と基本となる思想を明らかにするため、Petersen による報告 [43] [44] に基づいてシソーラスの開発に至る経緯とその途中で固められていった原則、それを支援した組織について整理する。

4.2.1 初期基盤の確立まで

美術分野の情報資料を扱う組織において、シソーラスが開発される以前の状況は次のようなものであった。Research Libraries Information Network (RLIN), Online Computer Library Center (OCLC) などの書誌ユーティリティに基づいて目録作業をする多くの図書館員は、LCSH を主題を表す用語の典拠として利用していたが、美術・建築分野の範囲を表現するものとして不足を感じており、独自の件名典拠ファイルを開発したり、要求に応じて LCSH を増補させていた。抄録・索引サービスは LCSH を応用したり独自のリストをもっていた。また、視覚資料コレクション、アーカイヴ、博物館、美術館にいたっては主題アクセスのできる体制をほとんど、或いは全く持っておらず、主題を表現する言葉のコントロールも行なっていなかった。

ニューヨークの Rensselaer Polytechnic Institute で建築史の教授職にあった Dora Crouch は1979年

2月、Universal Access System for Slides (UAS)を創始するために、図書館員、索引作成者、キュレーター、アーキヴィストとの会合を召集した。その目的はスライド・コレクションの効果的な管理方法について検討することであった。1979年5月、UASの次の会合で、コントロールされた語彙、またはシソーラスが視覚資料コレクションのコントロールに向けての最初の課題であることが確認された。UASはその後解散したが、その意志はシソーラスの開発へと引き継がれることとなった。

1980年初頭、プロジェクトはCouncil on Library Resourcesからの最初の補助金によって現状を調査することが可能となり、その結果はレポートにまとめられた。そのレポート、*Indexing and Abstracting in the Arts: A Survey and Analysis*では、美術分野の主要な主題索引リストを分析した結果、分野全体の要求を満たし得るような包括的なものは存在しない、という結論に至ったことが示された。1980年9月にはNational Endowment for the Humanities (NEH)から一年計画の補助金を受け、続く1981年から1982年の第二回目の補助金は建築部門の開発に費やされることとなった。

この時点で考案されていたシソーラスには、視覚芸術の歴史と創造に関する用語を含み、オブジェクトとそのレプリカ（あるいは複製物）、そして関連する文献を「繋ぐもの」を提供することが求められた。また、その適用範囲は地理的、歴史的に包括的であるが、図像学に関する用語は含まないと考えられた。用語は階層的に組織化され、国立医学図書館（National Library of Medicine）のMedical Subject Headings (MeSH)のモデルに基づき、コンピュータ利用のために最適化が図られる。そして全ての段階において研究者によるレビューが行われることとなった。

以上のように、最も初期の段階ではローカルな会合であったものが、同様の問題意識を持つ書誌サービス機関その他の賛同を得、更に財政

的な援助を得ることによって後の議論を展開する基盤が築かれていった。また、AAT開発における特徴の一つである組織を越えた協力体制は初期の段階から形成されていったとみることができる。このシソーラスは単一のシステムで利用されることを想定したものではないので、こうした人的、財政的な基盤を築くことが後に続く長い計画を支える上での重要なポイントであったと考えられる。

4.2.2 用語の収集

シソーラス開発へ向けての最初の作業は用語の収集である。それは既存の用語集、件名標目表、シソーラスから収集されることとなったが、既に利用されている語彙に基づいて構築するという姿勢はAATの基本原則となっている。つまり、それにより検索効率を最大にし、目録、索引作業に新しいシソーラスを取り入れることを容易にする必要があったのである。従って用語の典拠としてLCSHに優先権を与えることになった。LCSHに優先権を与えるという点は関係者によって特に強調されているが、特に用語の構造上の問題から、開発する語彙とLCSHとの間の相違が次第に明らかになっていった。つまりAATの計画していた階層構造には、LCSHの結合された用語構造は適さなかったのである。けれどもこうした相違にも拘わらず、AATはLCSHへ優先権を与える基本姿勢を維持し、必要が生じた場合にはLCSH用語は修正され、またLCSHの各々の概念は、そのまま導入されたものであろうと修正されたものであろうと、それに相当する概念を表すAATの各用語レコードに記述されることになった。これにより、AATを導入する図書館が、LCSHを持つ書誌レコードを追跡して望ましい主題へと結びつけるのを可能にすることが望まれたのである。

用語の収集に続き、建築部門とそれに関連する領域に必要と考えられる全てのカテゴリー、

あるいは階層が同定され、コンピュータ化されたリストから用語シートを作成するためのプログラムが書かれた。この用語の情報源となったリストは次の資料から調達された。

- (1) Journal of the Society of Architectural Historians
- (2) Avery Index to Architectural Periodicals
- (3) Picture Division of the Public Archives of Canada
- (4) International Repertory of the Literature of Art (RILA)
- (5) Architectural Periodicals Index of the Royal Institute of British Architects

4.2.3 用語の整理および編集

最初に収集された候補となる用語は約30000の用語シートとなり、重複、遺漏、形式などが調査された。類似する概念のシートは合併され、約80の階層のカテゴリーに従って大まかに整理された。1983年までに作業は大きく進展し、最初の大まかな階層の整理は完成されてスタッフは編集に取りかかったというが、この階層の整理までの過程とは、以下のようなものであった。

階層の構築に取り掛かったところから至る所に用語の欠落があることが明らかになったのである。まず、アルファベット順排列のために開発された用語を概念によって排列し直すと、用語が不足していることがすぐに浮かび上がってきた。また情報源となったリストは本来、文献の索引を作成するものであったため、多様な資料を対象とするというシソーラスの目的を達成するのには完全ではなかった。この問題に対処するために、包括的であるのに必要とされた用語は一つの階層の下位区分として加えることとなった。つまり、もとのリストは完全な情報源になり得なかったわけで、AATはその学術的な使命から、レファレンスブック、モノグラフなどから欠けている用語を徹底的に探し出すことを決定し、それは一つの分岐点となった。

1983年、J.Paul Getty Trustの支援を得て典拠の利用が可能となることで、用語について文献における定義が重要となり、数多くの用語辞典、目録からモノグラフに至るまでが詳細に調査された。結果として多くの用語が導入語として加えられ、定義やスコープ・ノートが追加された。これらのデータはAATのアルファベット順索引の記入の基本となった。

1985年にはAATはthe Getty Art History Information Program (AHIP)の設立と共に新しい時期に入った。それまでの5年間、プロジェクトは公に配布できる成果をあげていなかったが、AHIPの支援によってより現実的な目標が設定され、シソーラスの範囲を西洋美術と建築に焦点を絞めることになった。そして装飾美術と美術の部門は、建築とその支持部門が完成されるまで一時中断となった。

残された問題として、用語の結合に関することがあった。情報源から提供された用語の結合は、列挙の問題から維持されなかったのである。この分野で最も頻繁に使われる結合は、様式・時代とオブジェクトの名前、材質とオブジェクトの名前といったものだが、これらを全て列挙するとシソーラスはコントロールが出来なくなる。この問題は、様式、時代、材質の用語を結合するより階層に分けることによって解決することにした。そして、AATは様々な組織で利用されることを目指したので、用語の結合に関しては、標準的な規則と指示を示すものの、利用者(目録、索引作成者)の選択に委ねるものとした。

AATの開発は多くの協力者との共同作業によって進められたが、主なスタッフは美術史関係者と図書館情報学関係者から構成されている。そして編集の過程を通じて、編集者は外部の専門家に用語に関する質問の回答を求め、典拠作業においては文献、レファレンスブックを調査し、用語の使用や範囲、定義を決定したのである。

階層の構築の最終段階で学術的なレビュー団

体が召集され、1983年から1989年の間に28回のレビューが行なわれた。学術団体とテスト利用者グループは、シソーラスは沈滞したものであっても、独裁的なものであってならない、と強調している。つまり研究者の用いる言葉と、より基本的な情報源からの言葉との融合から成るものでなくてはならないというのである。またシソーラスは、用語全体の標準化と、様々な要求に対応できるような用語の詳細な区別との間でバランスをとることが求められるが、時の変化を抑制するように完全に包括的であることは不可能であり、用語は利用者の要求に応じて追加、変更されるものとした。

シソーラスの構造については、1984年に開かれた会議で、イギリスの分類理論家によってそれまでに開発されたアルファベット順の階層の列挙が批判され、より抽象的な概念から次第に時代や様式などの用語の階層へと展開させることになった。そして、1989年にはAATのファセット構造は精錬され、用語にコードを与える分類表記記号が開発された。このコードは用語をファセットと階層に配置し、機械が階層を再構築するのと、研究者が用語をスキニングするのを可能にするものである。

4.2.4 シソーラスの導入について

計画の当初から、AATはシステムから独立したものであり、様々な利用者の標準的な語彙となることを使命とした点で独自のものであったので、その目的を達成するために利用者からの支援を求める必要があった。先のNEHからの補助金から、Society of Architectural Historians, College Art Association, ARLIS/NAといった組織からの援助を得るにいたった。

1981年に、Research Libraries Groupの組織するArt and Architecture Program CommitteeのSubject Heading Task ForceはAATを正式に支持し、1982年にはArt Libraries Societyの会議上でAAT Advisory Committeeが発足

した。この会議でAATをRLINの典拠ファイルとして供給するという提案に対し、AAPCはRLGのスタッフを含むAAT履行のための下部委員会を組織した。

AATは書誌レコードの主要な制作者の承諾を得るために数年を要したが、シソーラスの必要性を強く感じていた美術図書館の団体は、少なくとも1990年の時点で導入の準備段階にあったという。レコードのほとんどが既にLCSHの標目と共に全国書誌ネットワークにあるが、新しい件名典拠リストへの移行は困難であるばかりでなく、費用の面においても相当のものであろう。LCSHに優先権を与えるという配慮があるが、このことに対してS. S. Gibsonは次のように予測している。AATはLCSHに代わるものになると提案されているが、実際には大学図書館や公共図書館では既にLCSHでの蓄積が膨大であり、移行するには大変な困難を伴うものである。一方、独立した美術図書館では旧来より独自に主題アクセスの手段を開発してきた経緯があり、利用の場として第一に考えられるのは、中でもこれまで件名標目表などを用いてこなかったスライド・コレクションではないだろうか[45]。

AATをMARCに導入する過程で、階層構造のシソーラスを保持し、表示するためには、USMARC典拠フォーマットは修正と新しいフィールドの追加が必要になることが明らかになり、LC Network Development and Standards Office、更にMachine Readable Bibliographic Information Committeeを通して修正と新しいフィールドの導入に成功した。更に、ファセット構造のシソーラスから引き出された用語を符号化するため1988年1月、MARBICCommitteeによってフィールド654の導入が可決された。1990年6月にはAATは典拠ファイルとしてRLINに乘せられたが、AATはRLINにLCSHと並んで乗せられた最初の典拠ファイルとなった。

4.2.5 利用者による評価

AAT は様々なデータベース制作者に用語を供給することを目的としたので、利用者による評価も重要な要素である。1984年の終わり、利用者のテストグループがデータベースに用語を適用することとなり、最初の7階層は約12の組織に分配されたが、1989年までにテストグループは150組織を越えた。これは二つの意味での成果をもたらした。つまり、美術分野のオンライン・データベースは始まったばかりでコントロールされた語彙を必要としていたし、AATは実際に適切で有用であるかどうか見極める必要があったのである。またこうした過程で、シソーラスを利用する際のガイダンスの必要性が明らかになり、主題分析と用語選択のガイドラインが求められた。そして、1987年に始まったトレーニング・ワークショップはガイダンスを必要とした全ての機関で展開された。AATの利用者に対する原則的姿勢は、様々な情報システムと特定の要求に対して開放的で、利用者団体と情報技術の進展の両方から要求される変更に対して柔軟であることを目指しており、利用者との連結をシソーラスの維持と発展において欠くことの出来ない要素としている。

4.2.6 第1版の出版とそれ以降

1989年には、考案された40階層のうち23階層を出版する契約がOxford University Pressと結ばれるに至ったが、その頃までに200の組織がドラフト・フォームを利用していた。そして1990年に、約47,000の用語を含む *Art and Architecture Thesaurus* 全3巻（最も要求の高かった建築部門と、装飾美術と美術のいくつかの部門を含む）がOxford University Pressより出版され、第1版はその年のアメリカ出版者協会の専門学術出版部門から賞を授与された。

1990年にはAATとGetty Conservation Institute's Documentation Programは保存科学分野の用語の開発を始めた。このプログラムは保存科学分野の抄録誌の作成を支援しており、

それにシソーラスを利用できるように、2000を越える新しい用語がシソーラスに加えられ、その分野の見地からいくつかの階層が再構築された。そして1992年には、Supplementが出版される。これには3000を越える新しいディスクリプタ、ガイド用語、導入語と、500を越える新しいスコープ・ノートが含まれ、また約1500の用語の削除、変化、移動についても記述された。

USMARC フィールド655と755が導入されて以来、このフィールドに利用される様々な用語リストにおけるアプリケーションや用語の不一致が問題となり、形式や種類を表現する用語を一致させる原理と方法の開発が必要となった。1992年に開かれたA Conference on Reconciliation of Form and Genre Terminologyという会議で約30の用語が一致させられ、正式名称をWorking Group on Form and Genre Vocabulariesとして以後年一回の会議を開催することが決定した。1993年、AATのオンラインでの利用がCanadian Heritage Information Networkで可能となった。

そして、1994年には約90,000の用語を含む *Art and Architecture Thesaurus* 第2版、全5巻が出版される。1991年に開かれた会議以来、図書館、美術館、アーカイブのための各々別の部門から成るマニュアルの必要が明らかになっていたが、*Guide to Indexing and Cataloging with the AAT*が第2版と共に出版された。以上のような過程を経てAATは現在に至る。

4.3 成立の背景からみた特質

AATは単一のシステムのためにつくられたシソーラスではない。それは、利用を想定した分野の主題範囲が広く、情報利用が最新のものに集中するわけではないので、単一のシステムで情報要求が充足される性格のものではなかったためである。美術分野の情報資料を扱う組織は様々であり、それぞれにおいてアクセス手段が必要とされていた。つまりシソーラス開発の

背景には、より包括的で基本的なものが必要とされるという学問分野独自の要因があったのである。

シソーラスの開発が最初に考案されたのは1979年だが、70年代は書誌ユーティリティによるオンライン分担目録システムの出現した頃でもあり、書誌ユーティリティを利用して目録作業を行う過程で美術分野の件名標目に対する不満が表出していったのは先に述べた通りある。また、美術分野の代表的な抄録・索引誌のデータベース化の始まったのは70年代前半の頃であった。更に、情報技術の進展に伴い博物館、美術館にもコンピュータの導入が検討されるという機運があった。こうした時期的な理由も、開発にあたっての協力体制の実現に影響したものと考えられる。

シソーラスに収録する用語は、主題に関連した既存のツールから収集されるが、AATでも同様の方法が採られた。このことは二つの意味を持つ。第一に、シソーラスの開発以前に、美術分野でも既存の語彙を用いて情報が蓄積されており、それとの関連性を可能な限り残すことで検索効率をあげる必要があった。シソーラスの必要性が関係者に認識されたのは1979年で、その完成は1990年と、シソーラスの歴史から見ると遅いスタートといえる。既に蓄積のあるところへ新しいシソーラスを導入するには、関連性を維持するのが不可欠である。もう一つとして、AATが用語を収集するにあたって多数の文献を調査したのは、用語の形式とその概念を確認する必要があったからである。そのためにも既存の二次資料が重要な情報源となったのであり、その結果はAATのスコープ・ノートとなって反映されている。用語の形式を採用する際にはその文献的根拠が厳しく求められており、こうした調査によって信頼性を高めることは、人文科学系の学問分野では特に重要な点である。

5. Art and Architecture Thesaurus の内容

5.1 対象とする範囲

AATの第2版では、用語は古代から現代までの西洋の美術、建築、装飾美術、有形の文化の学問領域を含み、その範囲は“art and architecture”というタイトルに示されるよりも広域であるとなっている[46]。中でも用語の多くはファセット別の比率にも現れる通り、オブジェクトの名称である。これは、研究が作品という対象に基づいているという点と、シソーラスがオブジェクトについて記述するための語彙を提供するという使命を担っていることの反映と見なすことができる。

図像学に関する用語は含まないが、これは既に確立したツールが存在するためである。また図像学については、研究方法としては分野の一領域と見なせるものの、宗教学、神話学などへ独自の広がりをもっているため、シソーラス全体の中に組み込んだとしても効果的でないだろう。しかし、図像学の領域で象徴的な意味をもつような具体的、一般的な名称や、抽象的概念を表す用語は含まれている。

AATは美術、建築の部分を特定し、記述するのに必要とされる領域を含むことを目指しているが、要求される全ての要素を包含することを意図しなかったため、領域を広げるために併用が予想されるものとして次のツールをあげている。

- (1) ICONCLASS
- (2) Thesaurus for Graphic Materials 1:
Subject Terms
- (3) Library of Congress Name Authority
File
- (4) Union List of Artist Names
- (5) Thesaurus of Geographic Names [47]

ここで明かなように、AATには人名、地名は含まれない。AATに人名が含まれていないことを惜しむ声もあるが[48]、これを範囲に入れた場合、それが膨大な数にのぼることは3章であげた人名事典の例からも明らかである。そのため、人名、地名については別の固有名典

拋コントロールとして展開されている。

5.2.1 階層表示

5.2 Art and Architecture Thesaurus の構成

ここでは、AAT の第 2 版 [49] と AAT Editorial Principles and Convention [46] に基づいて、その構成について述べる。また、図によって例をあげるが、それは第 2 版からの引用により作成したものである。

AAT は次の二つの表示から構成されている。

(1) 階層表示

(Hierarchical Display Vol.1-2)

(2) アルファベット順排列表示

(Alphabetical Display Vol.3-5)

階層表示は 7 つのファセットと 33 の階層（またはファセットの下位区分）から組織される。

A ファセット

AAT では、シソーラスの体系化にファセットによる方法を採用している。ここでいうファセットとは、他の用語のクラスから識別しうるような、なんらかの特性を共有する用語の集合で、シソーラスの用語全体の主要な下位区分を構成しており、ファセットは抽象概念から具体的な実体へと移っていくように排列されている。AAT が採用しているファセットと階層を図 1 に、ファセットの概要を以下に示す。

"(1) Associated Concepts Facet (連合概念ファセット)

人間の思考と活動の研究および実行 (制

B ASSOCIATED CONCEPTS FACET

B.BM Associated Concepts

D PHYSICAL ATTRIBUTES FACET

D.DC Attributes and Properties

D.DE Conditions and Effects

D.DG Design Elements

D.DL Color

F STYLES AND PERIODS FACET

F.FL Styles and Periods

H AGENT FACET

H.HG People

H.HN Organizations

K ACTIVITIES FACET

K.KD Disciplines

K.KG Functions

K.KM Events

K.KQ Physical Activities

K.KT Processes and Techniques

M MATERIALS FACET

M.MT Materials

V OBJECTS FACET

V.PC Object Groupings and Systems

V.PE Object Genres

V.PJ Components

Built Environment

V.RD Settlements and Landscapes

V.RG Built Complexes and Districts

V.RK Single Built Works

V.RM Open Spaces and Site Elements

Furnishings and Equipment

V.TC Furnishings

V.TE Costume

V.TH Tools and Equipment

V.TK Weapons and Ammunition

V.TN Measuring Devices

V.TQ Containers

V.TT Sound Devices

V.TV Recreational Artifacts

V.TX Transportation Vehicles

Visual and Verbal Communication

V.VC Visual Works

V.VK Exchange Media

V.VW Information Forms

図 1 AAT のファセットと階層 [49]

作)に関連する抽象概念と現象から構成される。理論的あるいは評論的関心事, イデオロギー, 姿勢, 社会的または文化的運動も含まれる。例: beauty, balance, connoisseurship, metaphor….

(2) Physical Attributes Facet (物理的属性ファセット)

素材や人為的産物の知覚または測定できる特徴を表す。サイズやかたち, 素材の化学的特性, テクスチャ, 硬度, 表面の装飾や色などの特徴も含む。例: strapwork, borders, round, waterlogged….

(3) Styles and Periods Facet (様式・時代ファセット)

美術, 建築, 装飾美術に関連する, 様式的・時代的区分において受け入れた名称。例: French, Louis XIV, Xia, Black-figure, Abstract Expressionist….

(4) Agent Facet (エージェントファセット)

職業や活動, 物理的・精神的特徴, または社会的役割や状態によって同一視できる人, 人びと, 組織の呼び方。例: printmakers, corporations….

(5) Activities Facet (活動ファセット)

意志的な活動や物理的・精神的活動, 個別的な出来事, 連続した活動, 目的達成のための方法, 素材やオブジェクトに生じる過程などを取り巻く領域を包含する。ここでいう活動とは, 専門の学問分野におけるものから特定の出来事まで多岐にわたる。例: archaeology, engineering, analyzing, contests, exhibitions….

(6) Materials Facet (素材ファセット)

自然あるいは合成による物理的物質を扱う。特定の素材からある機能によってつくられた素材や, 加工していない素材から製品にされたものまで含む。例: iron, clay, adhesive, emulsifier, artificial ivory, millwork….

(7) Objects Facet (オブジェクトファセット)

人間の意志的な活動によってつくられた触覚・視覚できる個々のもの。物理的かたちのものとしては, 建造物からイメージ, ドキュメントまでを含み, その目的としては, 実用的なものから美的なものまでを含む。例: aeches, rivers, chisels, still lifes, capricci….” [46]

B 階層

ここでいう階層とは, 7つのファセットの中で更に同種の用語を分類し, 階層的に表示するもので, 合計33の階層がある。階層表示によって類と種, クラスと下位クラスといった用語間の関係を表わすようになっている。AATでは, ディスクリプタは一つの上位語しか持たず, 従って, ディスクリプタは最も一般的な場所に位置付けられる。例えば, plans は architectural drawingsの一種であるが, そうでないものもある。従って, ディスクリプタplans (drawing) は orthographic drawings の下位語と見なされる。一つの上位語のもとでは, ディスクリプタはアルファベット順に排列される。また, AATでは部分・全体関係を採用していない。例えば, columns (円柱) は architectural elementsとして扱われ, templesの部分とはなっていない [46]。

C ディスクリプタ

AATのディスクリプタは単一の概念を表わしている。ディスクリプタは件名標目表や既にご利用されていた二次資料の索引から集められた。AATには, ディスクリプタで表されている概念に対して, 関連する標目, 優先, 非優先の形式が導入されている。ディスクリプタはその形式と意味を確立するために, また全ての形式(同義語や他の綴り方)を導入するために, いくつかの資料において徹底的に調査された。Whiteheadによると, LCSHの標目とAATのディスクリプタとの関係付けには以下の種類がある。(1)標目とディスクリプタ (2)USE参照と

prints		VISUAL WORKS (VC)
<prints by process or technique>		
<prints by process: transfer method>		
relief prints		
VC.491	woodcuts	
VC.492	beni-e	
VC.493	chiaroscuro woodcuts	
VC.494	color woodcuts	
VC.495	benizuri-e	
VC.496	nishiki-e	
VC.497	tan-e	
VC.498	urushi-e	
VC.499	screen prints	
VC.500	projections	
VC.501	rubblings	
VC.502	sculpture	
VC.503	<sculpture by form>	
VC.504	book objects	
VC.505	environments (sculpture)	
VC.506	installations (sculpture)	
VC.507	mobiles	
VC.508	plaquettes	
VC.509	scatter pieces	
VC.510	tableaux	

図2 AATの階層表示 [49]

ディスクリプタ (3)標目と AAT の UF (4)USE 参照と AAT の UF (5)事前結合の標目と AAT の focus term [24]。

多くのディスクリプタは名詞および名詞句であるが(例: buildings, public buildings) 活動ファセットの階層では動名詞も含まれる(例: collecting)。AAT の複合語のディスクリプタは自然語順で、この点で MeSH が倒置形式をとるのとは異なっている(例: public buildings, 従って buildings, public から参照される)。

D ガイド・ターム

ガイド・タームとは、ディスクリプタとしては採用されないが、上位概念として階層構造上で意味をなすものである。例えば〈…by function〉〈…by location or context〉とすることにより下位区分を特定して利用者の理解を促している。ISOのガイドラインではノード・ラベルと呼ばれるものに相当する(図2)。

5.2.2 アルファベット順排列表示

アルファベット順排列表示はディスクリプタ

についての詳細な情報を提供すると共に、導入語、ガイド・タームからディスクリプタへの参照を示すものである。

A ライン・ナンバー

ライン・ナンバーは、アルファベット順排列表示から階層表示上の位置へのリンクを提供する。アルファベットは階層、数字はラインを表わしている。

B メジャー・ソース・コード

用語によって表される概念が、主な情報源となった語彙に含まれていることを示すために、ライン・ナンバーの右にカッコ付の記号で記される。しかし、これは概念が含まれているという意味で、情報源における用語の形式までは明らかにしていない(図3)。

D ヒストリー・ノート (HN)

初版出版後に加えられた新しいディスクリプタ、ディスクリプタの削除、ディスクリプタまたはガイド用語の変更、その他用語やスコープノートの変更に関連する記録である。

E スコープ・ノート (SN)

用語の意味と用法を明らかにするもので、(1)用語の意味、範囲または利用方法を示す、(2)適

sculpture	
VC.502	(A,L,N,B,R)
SN	Use for works of art in which images and forms are carried out primarily in three dimensions, especially those that retain the quality of being tangible objects or groups of objects. As works become more diffused in space or time, or less tangible, use other terms, such as mail art or environmental art.
UF	sculptures
RT	sculpture techniques

図3 AAT のアルファベット順排列表示 [49]

切な用語を選択するガイドをする、(3)他の用語との区別をする、(4)関連または重複する概念へと導く [46]、といった機能を果たす。

AAT では利用についてのガイダンスを提供するスコープノートを instructional scope note、用語を定義するスコープノートを definitional scope note と呼んでいる。instructional scope

note は、用語の利用を限定する、重複した意味をもつ複数の用語を区別する、または他のアドバイスを提供するといった役割をもち、通常 “Use when…, Includes…” といったかたちで記述される (図4)。

definitional scope note では、定義とその情報源が示されており、それは第1巻に掲載されている約2800点に及ぶ情報源のリストに対応している。AAT の開発の過程で、リストにあるような既存の資料が詳細に調査されたのは、ディスクリプタの形式とスコープ・ノートの決定に重点がおかれたためであり、その意味でも、スコープ・ノートは AAT の中で重要な位置を占めていると考えていいだろう (図5)。

F 相互参照 (USE, UF, RT)

同義語と異なる綴りは、導入語としてディスクリプタへの USE 参照と共にアルファベット順排列表示に記入される。AAT ではこの関係はディスクリプタの真の同義語のみとするとし、

abbozzi		community art	
VC.586		BM.180	(R)
ALT abbozzo		HN May 1993 related term added	
SN	Use especially for sketches that are part of the underpainting and establish the tonal relationships of a painting; also, for a block of sculptural material at a stage where it has been worked to a rough form of the finished work.	SN	Includes art undertaken in conjunction with particular communities, often socially deprived, usually with the idea of producing an effect or inspiring response specifically within those communities, with no reference to widely established standards. For art intended to beautify and enrich public places, use public art.
UF abozzi		UF art, community	
		RT public art	

図4 instructional scope note の例 (1) [49]

assemblage		associationism	
KT.803	(L)	BM.987	(R)
HN	April 1991 descriptor moved November 1990 lead-in term added	HN	February 1993 descriptor moved April 1990 descriptor added
SN	A 20th-century technique of creating a three-dimensional work of art by combining various elements, especially found objects; may include elements painted, carved, or modeled by the artist. (MAYER)	ALT	associationist
UF	assembling (sculpture technique)	SN	The doctrine that mental and moral phenomena may be accounted for by association of ideas. (OED)
		UF	association of ideas

図5 definitional scope note の例 (1) [49]

color		theater	
DI.2	(A,L,B,R)	KD.12	(L,R)
HN February 1992 descriptor moved		HN April 1993 related term added	
UK colour		UK theatre	
SN Use to refer to perceived qualities that result from the response of vision to the wavelength of reflected or transmitted light. For individual chromatic colors and achromatic colors or neutrals, use colors.		SN Use for the professionally oriented study of theater, involving training, practice, and study in the processes of doing theater. For the academically oriented study of theater, use drama.	
UF chromatics		UF arts, theater theater arts	
		RT drama	
colour		theatre	
SEE color		SEE theater	

図6 イギリス英語からディスクリプタへの参照 [49]

極めて近い意味の用語すなわち準同義語や狭義の概念を示す用語はディスクリプタとして採用され、その利用についてはスコープ・ノートが明らかにすることになっている。ここに AAT のディスクリプタとその範囲についての厳密な態度が見て取れる。AAT では、多くの USE 参照は倒置形式からディスクリプタへの参照である。

また、AAT の用語はアメリカ英語に基づくため、イギリス英語も組み入れられており、イギリス英語からディスクリプタへ SEE 参照が示される。ディスクリプタのもとではイギリス英語は UK 記号で示される (図6)。

シソーラスには上位語、下位語を BT, NT 記号と共に示す場合があるが、AAT のアルファベット順排列表示には上位語、下位語の指示がない。これは、ライン・ナンバーを辿ることによって階層における位置を確認できるからであり、このことは MeSH に共通する。RT で表される関連語は意味的に関連するディスクリプタへのガイドとして使われるが、AAT では階層表示をすることによって RT 参照の必要性の多くを低減できるとしており、従って、ディスクリプタから関連語への参照は、基本的には階層表示上で別の階層に属するものに限るとしている。

5.3 Art and Architecture Thesaurus の内容面に見られる特質

5.2 では AAT の構成について述べたが、これを踏まえて以下では AAT の内容面に見られる特質について考察する。

5.3.1 スコープ・ノートの機能

ATT の注目すべき特質の一つとしてスコープ・ノートの機能をあげることができる。AAT が開発される過程でスコープ・ノートの決定が大きな割合を占めてきたことは沿革で明らかにできたが、AAT におけるスコープ・ノートの機能は、従来示されてきた範囲と些か異なり、シソーラス全体の中でも特に重要なものとして意識的に位置付けていると考えられる。

従来の見方では、“ディスクリプタを索引作業時あるいは検索時に使用する際に、特定の意味に限定することを指示する注釈である” [50] とか、“用語に限定された意味を指し示すために付与され、他の可能な意味を排除する” [02] とするものが一般的である。また定義機能に関しては、“辞書的な定義を意図するものではなく、索引言語において用語の利用を示すものである” [02] “スコープ・ノートは本当の定義

である必要はない。特定の用語がどのように使用されるべきか否か、を教えるガイドである”

[01] とされる。このように、スコープ・ノートの機能は、索引作業および検索にディスクリプタを使用する際にその意味を限定すると同時に他の可能性を排除することにより、従って、辞書的な定義機能とは本質的に異なることになる。しかし、このような限定的な見方は、すべての分野において当てはまるとはいえない。

例えば、*Thesaurus of ERIC Descriptors* では、(1)下位語の利用を推薦したり、索引作成者や探索者を PUBTYPE カテゴリーに向ける、(2)利用者や探索者に初歩的なシソーラス利用法を教える、(3)他のディスクリプタを提案する [51] となっており、積極的なガイド機能が示されている。教育学のような社会科学系の学問分野だけでなく、人文科学分野においても、用語が曖昧であるという指摘がされるが、それは抽象的な概念を表したり、日常使う言葉に近い用語を多用することに起因する。そうした場合、スコープ・ノートによって示されるものが利用者にもたらす意義は大きい。しかし、それが単に意味を限定するという範囲にとどまるものとしたら、概念の捉え方を一致させるという機能を果たし得るだろうか。シソーラスの利用を特に人文科学系の学問分野において考えたとき、スコープ・ノートにはより系統的なガイドと信頼のおける明確な定義が必要とされるはずである。

AAT では、スコープ・ノートの役割を次のように示している。

- (1) AAT における用語の意味、範囲、利用を指し示す。
- (2) 利用者が最も適切な用語を選択するためのガイド。
- (3) 特定の語を他のものから区別する。
- (4) 利用者に関連した、あるいは重複した概念へ指示する [46]。

更に、スコープ・ノートの機能的側面から、利用方法を提供する instructional scope note

と用語を定義する definitional scope note の二つに分けている。

(1)instructional scope note は、用語の利用の限定、重複した意味をもつ複数の用語間の区別、またはアドバイスの提供といった役割をもつ [46]。この種のスコープ・ノートでは、他の用語への参照も行われるが、その場合には、スコープ・ノート中でもとの用語について言及され、相互参照の関係が保たれている。図7では、book objects, artists' books, bookworks の範囲について詳しく説明されている例を示した。

(2)definitional scope note は辞書的な定義機能を発揮するスコープ・ノートである。辞書的な形式の定義がシソーラスに含まれるのは一般的ではないが、AAT に含まれている用語の特性と、曖昧な、あるいは議論の余地がある用語の意味を明確にしたいという願いから、この種のスコープ・ノートがふんだんに供給される [46]。定義の情報源を示す記号は最後に付けられるが、全ての記号は本体の情報源のリストに見つけることができる。AAT のスタッフが作成したり、またはいくつかの情報源から合成した場合は、情報源は示されない。また、スコープ・ノートの形式は編集規定に従って開発されたので、情報源が示されても一字一句変わらず引用されたことを意味するものではない。複数の情報源からの引用を示すものもある。図8では、3種類の definitional scope note、つまり、一つの情報源から引用されているもの、複数の情報源から構成されているもの、情報源は示されていないが定義機能を果たしているものを示した。

スコープ・ノートの機能は従来、(1)意味の明示（あるいは限定）と、(2)利用あるいは選択のためのガイドであったが、意味の明示とは限定を含むもので、そこで示される定義は辞書的な定義ではなかった。これはこれまでシソーラスが利用されてきた分野で確立されたものである。しかし、人文科学分野におけるシソーラスの利

artists' books VW.1017 (H,L,R) HN June 1992 descriptor added ALT artist's book SN Use for books, whether unique or multiple, made or conceived by artists. For texts written by artists for the sake of their informational content, use artists' (ALT of artists) plus writings. For artists' books that emphasize the physical book as a work of art, use bookworks. For works that look like or incorporate books but do not communicate in the ways characteristic of books, use book objects. UF art, book book art books, artists' RT book objects	book objects VC.504 ALT book object SN Use for works of sculpture, usually one-of-a-kind, that look like books or incorporate books but that do not communicate in the ways characteristic of books, such as containing print or images, being experienced sequentially or in fragments, as page by page. For books made or conceived by visual artists, use artists' books or bookworks. UF objects, book RT artists' books bookworks
	bookworks VW.1018 (L) HN June 1992 descriptor added ALT bookwork SN Use for artists' books that exploit the book form or alter its physical structure as part of the content of the work. Also includes works where emphasis is on the fine crafting of the book. For sculptures that look like or incorporate books but do not communicate in the ways characteristic of books, use book objects. RT book objects

図 7 instructional scope note の例 (2) [49]

graphic design KD.30 (B,R) HN December 1991 scope note changed March 1991 descriptor moved SN Preparing and creating words and images for commercial applications such as book production, posters, advertising, and packaging. (A-Z) UF design, graphic	hamlets RD.6 (A,B) ALT hamlet SN Use for small rural centers which contain basic community, education, and religious facilities and which generally do not exceed 250 residents;(LOC) may also refer to the smallest incorporated units of a municipal government. (W)
Greek style bindings PJ.3356 ALT Greek style binding SN Bindings employed in the 15th and 16th centuries in France and Italy for Greek texts and translations from Greek, characterized by headbands projecting beyond the boards at the head and foot of the spine, thick wooden boards with grooved edges, and straps fastened to pins set in the grooves. UF bindings, Greek fashion bindings, Greek style Greek fashion bindings	

図 8 definitional scope note の例 (2) [49]

(Styles and Periodsファセット)	Rococo	
(Activitiesファセット)	carved	
	gilded	
(Materialsファセット)	wood	
(Objectsファセット)	<u>chair</u>	focus term

図9 modifier descriptor とファセットの関係 [47]

用を考えた場合、スコープ・ノートに必要とされる機能の高さから、(1)および(2)を拡充させたものといえる instructional scope note と、より信頼のおける定義を提供する definitional scope note がつくられたと考えられる。更に AAT ではスコープ・ノートの出典を明記しているが、それは文献による調査に基づくことを示すためでもあり、それにより信頼性を確立するという意味で、一つの特徴と考えていいだろう。

本研究ではシソーラスの機能を「概念の体系を提示する役割」とする立場をとるが、その立場から見た場合、AAT のスコープ・ノートは概念の捉え方を明らかにし、また利用者に対してガイドの役割を果たす、という意味でそうした機能を果たすものと考えられる。

5.3.2 階層構造の機能

AAT では、アルファベット順排列表示を階層表示への索引と見なしている [46]。つまり、階層表示の利用によってシソーラスの本質的な機能が発揮されると考えているのであり、これは通常、アルファベット順排列表示が本体とされるのと対照的である。AAT では7つのファセットとその下位区分である33の階層によって主題分野の概念体系を表しているが、それだけでなく、階層構造が、索引対象が何についてのものであるかよりも、何であるかについて分析、記述する観点を提示するような意図をもって構成されている。

AAT が利用を想定する多くの資料は、それが何についてのものであるか、というよりもそれが何であるかという観点からアプローチされる。Barnet の言葉を借りれば、AAT の抽象的な概念から物理的な実体へと進むファセットの排列はそのような資料を具体化する際のナビゲーション機能を利用者に与えるのである [47]。具体的には、AAT と付随するマニュアルをガイドとして分析を行い、原則的に階層の順序に従って用語を結合するようになっている。例えば、一般的な用語の結合形式に modifier descriptor と呼ばれるものがあるが、それは focus term という一つの中心となる用語（通常オブジェクトファセットの用語）と、一つまたは複数の修飾語として用いられる用語（他のファセット）からなる。この modifier descriptor の作成にはファセットの順序が反映していおり、ファセットの順序を繰り返すことが一連の記号列の作成に利用される。図9は Rococo carved gilded wood chair という結合の例である。この例では、Rococo carved gilded wood chair は各ファセットのディスクリプタの結合で、この順序はファセットの排列、すなわち、階層表示の1巻から2巻における排列を反映したものである。AAT では、こうした結合方法を示すことにより、事後結合、事前結合の両システムで利用されることを考慮している。

様々な資料に対してアクセスを可能にすることは決して容易なことではないが、AAT の構造は、索引作業および検索にシソーラスを利用する者に対し、様式、素材、オブジェクトといっ

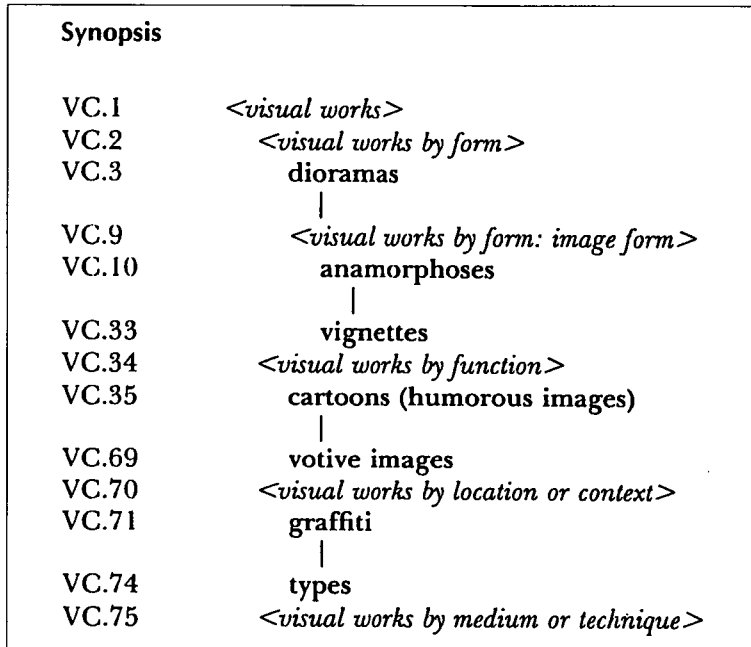


図10 Visual Works 階層の一覧表 [49]

た観点を提示して分析のガイドの役割を果たすといえるのではないだろうか。

また、階層構造に対する理解を助けるものとして、ガイド・タームの機能をあげることができる。ガイド・タームは、ディスクリプタとして採用されていないが、上位概念として階層構造上で意味をなすものであり、それによって下位区分は特定化される。例えば〈arts and related disciplines〉というような上位概念を示すものと、〈…by form〉というように観点を特定するものがある。ガイド・タームは階層上に表示されるだけでなく、個々の階層の始めの頁において一覧表として示され、利用者が AAT の階層がどのような観点から構築されているのか理解するのを促している。こうした意味においても、AAT の階層構造は利用者が全体の体系を一貫して把握できるように配慮していると見なすことができる (図10)。

5.3.3 シソーラスの用語辞典的機能

AAT の特徴として、用語辞典的な機能を持

ちうる点を指摘することもできる。情報の蓄積と検索に利用するシソーラスは辞典的な機能を発揮することを本来的な目的としたわけではないが、既に述べたようなスコープ・ノートに求められる信頼性と的確さは、結果として用語辞典としても活用できる可能性を生んだといえる。最初から辞典として利用することはなくとも、スコープ・ノートにより用語辞典的な情報を得ることは有り得るし、その出典を辿ってより専門的な資料の存在を知ることであろう。また、ディスクリプタとスコープ・ノートの情報源となった資料のリストは、美術に関連した二次資料と基本文献の書誌となっている。

B. H. Weinberg は、AAT は慎重に調査された用語、情報源の明示、豊富なスコープノートといった点から、辞書編纂者のレファレンスブックとしての役割を果たすこともできるとしている [48]。このような他の二次的ツールへの応用として、AAT は範囲の広さから他のシソーラス作成の情報源となることができるといえるが、実際に *The Music Thesaurus* は Sound Devices の階層を借用したという。また、AAT と範囲を

共有しないと思われる分野でもいくつかの階層は参考になるが、中でも Disciplines と Information Forms の階層が興味深いものとしてあげられている。更に、シソーラスの際だってブラウジングしやすい点は、言葉に興味をもつ者や美術の愛好者にとって楽しいものになるだろうとも述べている [48]。

他のシソーラス作成に応用することは従来も行われてきたが、スコープ・ノートで辞典的な意味を確認するとか、他の資料への手がかりとして利用することなどはこれまであまりなかった要素である。どのような目的で利用されるにせよ、AAT が辞典の編纂にも匹敵するほどの時間と手間を掛けられたことは明らかであり、信頼するに足る興味深い資料であることは確かである。

6. 結論

本研究では、シソーラスの概念の把握を一致させるという機能に着目し、シソーラスを取り上げるにあたって「概念体系を提示するもの」という観点を導入した。また、主題アクセスをめぐる環境が変化する中で、シソーラスを書誌コントロールの一領域に位置づけられることも示した。そうした観点を基本的な立場として、*Art and Architecture Thesaurus* の成立過程と内容に影響を与えた諸要素を整理し、その特質を明らかにすることを試みた。

美術分野において、未整備であった主題アクセスのためのツールが強く望まれたのは、図書館、書誌サービスといった情報提供機関が情報の増加への対応を強く迫られていたためであり、更に博物館、美術館等へのコンピュータの導入に伴い新たな情報提供のあり方も問題になっていた。

AAT の原則が確立されていった過程には、主題分野と時期的なものに起因する特徴が認められる。まず、AAT は初期の段階から複数の組織で利用されるものを目指したが、これは美

術分野の情報資料とそれを扱う組織が共に多様であると同時に、この分野の情報要求が単一のシステムで充足することが出来ない性質のものであったためである。こうした分野でシソーラスの開発が実現したのは、同様の問題意識をもっていた組織間の協力体制の確立と、財政的支援の獲得によるところが大きい。また、AAT は既存の語彙との共存を図ったが、これは計画が実行に移された時点で既に多くの情報の蓄積があり、検索効率を維持する必要があったためである。それを実行するために、多くの時間が費やされることとなったが、結果として AAT は書誌ユーティリティの典拠ファイルとして採用されるに至った。

内容面では、人文科学特有の用語の曖昧さという問題から、用語の形式と定義が重視され、文献的根拠が追求された。それは、スコープ・ノートに反映されるに至っている。同時に同義語とする基準も厳しく設定されたが、それも用語の重要性を考慮したためである。また、AAT の構造は、オブジェクトを中心とした主題分野の概念体系を反映させたものとなったが、それは学問領域を反映するだけでなく、シソーラスとガイドを用いることにより、主題分析の方法が確立していないという問題に対して、分析のための枠組みを示そうとするものであった。範囲の広さという問題に対しては、全ての要求をシソーラスで満たすことを意図せず、他のツールの併用を求めた。更に、スコープ・ノートに求められた定義の厳密さと信頼性は、シソーラスが用語辞典的な機能を果たす可能性をもたらすものとなった。

本研究では、シソーラスに求められる要件として、概念体系の提示の機能を重視するという観点を採用したが、AAT は、豊富なスコープ・ノートにより利用者に対して概念の把握の仕方を提示している点と、分野の特質を反映し、分析の枠組みを与えるような構造をもっているという点から、こうした機能をもつものと考えられる。

AATは美術という一分野における事例だが、人文科学系の学問分野で主題アクセスのためのツールを考える際に、AATのこうした特質は示唆を与えるものであろう。このシソーラスが他のものを開発する際のモデルと成りうるかを厳密に判断するためには、実質的な評価を含めて更なる研究が望まれる。

謝辞

本稿は平成7年度愛知淑徳大学大学院文学研究科図書館情報学専攻修士論文に基づくものであり、研究を進めるにあたってご指導いただいた愛知淑徳大学文学部図書館情報学科の長澤雅男教授に深く感謝の意を表する。

引用文献

- [01] Lancaster, F.W. Vocabulary Control for Infomation Retrieval. 2nd ed. Virginia, Information Resource Press, 1986. 270p.
- [02] ISO 2788-1986 (E)
- [03] 神門典子 ほか. 概念の表現の可能性に関するシソーラスの比較調査. Library and Informatio Science, No.26, p.103-114 (1988)
- [04] ISO 2788-1974 (E)
- [05] BS 5723:1970
- [06] UNISIST Guideline for the Establishment and Development of Monolingual Thesauri. 2nd rev. ed. Paris, UNESCO, 1981. 64p.
- [07] 福田求; 影浦峽. 専門用語の「を見よ」参照に関する調査研究. Library and Information Science, No.30, p.1-23 (1993)
- [08] 岸田和明 ほか. シソーラスの比較評価「概念の体系の提示」の性能を中心に. 情報の科学と技術. Vol.38, No.10, p.565-572 (1988)
- [09] 三浦逸雄. “9. 資料組織”. 図書館学研究入門: 領域と展開. 長澤雅男, 戸田慎一編. 東京, 日本図書館協会, 1990. p.130-155.
- [10] 根本彰. “10. 書誌コントロール”. 図書館学研究入門: 領域と展開. 長澤雅男, 戸田慎一編. 東京, 日本図書館協会, 1990. p.156-169.
- [11] 丸山昭二郎, 岡田靖, 渋谷嘉彦. 主題組織法概論. 東京, 紀伊國屋, 1986, 224p.
- [12] Petersen, Toni; Molholt, Pat ed. Beyond the book. Massachusetts, G. K. Hall & Co., 1990, 275p.
- [13] 根本彰. Patric Wilsonの書誌コントロール論. 書誌索引展望, Vol.9, No.4, p.1-16 (1985)
- [14] Rorvig, Mark. E. Introduction. Library Trends, Vol.38, No.4, p.639-643 (1990)
- [15] 根本彰. 図書館学の基礎概念としての書誌コントロール. 図書館学会年報, Vol.31, No.3, p.110-121 (1985)
- [16] 丸山昭二郎. “1 総論”. 主題情報へのアプローチ. 丸山昭二郎編. 東京. 雄山閣, 1990. p.17-34
- [17] 新潮世界美術辞典. 東京, 新潮社, 1985. 1647, 149p.
- [18] Library of Congress Subject Headings 17th edition Vol 1. Washington, D. C., Library of Congress, 1994, 1289p.
- [19] オックスフォード西洋美術事典. 東京, 講談社, 1989.
- [20] 神林恒道, 潮江宏三, 島本浣編. 芸術学ハンドブック. 東京, 勁草書房, 1989, 283p.
- [21] Kleinbauer, W. Eugene; Slavens, Thomas T. Research Guide to the History of Western Art. Chicago, American Library Association, 1982, 229p.
- [22] Tibbo, Helen R. Indexing for the Humanities.

- Journal of the American Society for Information Science, Vol.45, No.8, p.607-619 (1994)
- [23] Fawcett, Trevor. Subject indexing in the visual arts. Art Library Journal, Vol.4, No.1, p.5-71 (1979)
- [24] Whitehead, Cathleen K. "The Art and Architecture Thesaurus as an alternative to Library of Congress Subject Headings. "Cataloging heresy: Challenging the standard bibliographic product: Proceedings of the Congress for Librarians 1991, Medford, Learned Information, 1992. p.59-74.
- [25] Jones, Louis Swan. Art Information: Research methods and resources. third edition. Iowa, Kendall/Hunt, 1990, 373p.
- [26] "4.10 二次資料" 図書館情報学ハンドブック. 図書館情報学ハンドブック編集委員会編. 東京, 丸善, 1988. p.354-388
- [27] 守田奈緒子; 上田修一. 絵画の索引法: 段階的絵画解釈を応用した三つの索引法によるデータベースの作成と評価. アート・ドキュメンテーション研究. No.4, p.3-16 (1995)
- [28] Peterson, Toni. Computer-aided indexing in the arts: the case for a thesaurus of the art terms. Art Library Journal, vol.6, no.3, p.6-11 (1981)
- [29] Pointon, Marcia. はじめての美術史. 木下哲夫訳. 東京, スカイドア. 1995. 195p.
- [30] 伊藤章. 海外出版レポート・ドイツ: 蘇った美術大百科事典. 出版ニュース. 二月下旬号, p.14 (1992)
- [31] Encyclopedia of World Art, Vol.1, New York, McGraw-Hill, 1958.
- [32] Price, D. J. de Solla. リトルサイエンス・ビッグサイエンス: 科学の科学・科学情報. 島尾永康訳. 大阪, 創元社, 1970, 224p.
- [33] Chamberlin, Mary W. Guide to Art Reference Books. Chicago, ALA, 1959.
- [34] Arntzen, Etta; Rainwater, Robert. Guide to the Literature of Art History. Chicago, ALA, 1980.
- [35] Ehresmann, Donald L. Fine Arts: A Bibliographic Guide to Basic Reference Works, Histories, and Handbooks. 3rd ed. Libraries Unlimited, 1990.
- [36] 水谷長志. 美術研究における抄録・索引誌の動向 BHA の創刊をめぐる. ファッションドキュメンテーション. No.2, p.39-54 (1992)
- [37] 津田良成 "6.1 総説" 図書館情報学ハンドブック. 図書館情報学ハンドブック編集委員会編. 東京, 丸善, 1988, p.357-545
- [38] 新倉利江子. 大学図書館における人文科学分野の研究者を対象とした情報サービスの可能性. Library and Information Science, No.28, p.61-80 (1990)
- [39] 吉田憲一. 主題検索とOPAC: 司書課程の学生への目録利用調査から. 図書館学会年報. Vol.40, No.2, p.71-82 (1994)
- [40] 上田修一; 守屋まゆみ. オンライン閲覧用目録 (OPAC): 米国図書館振興財団 (CLR) の調査を中心に. 大学図書館研究, Vol.25, No.9, p.1-13 (1984)
- [41] Stam, Deirdre C. "The Quest for a Code, or a Brief History of the Computerized Cataloging of Art Objects". Beyond the book: extending MARC for subject access. Petersen, Toni; Molholt, Pat ed. Boston, G. K. Hall, 1990, p.117-143.
- [42] Walter, Nadine. 視覚芸術におけるコンピュータ利用の概況—1991. アート・

- ドキュメンテーション研究, No.1,
p.49-65 (1992)
- [43] Petersen, Toni. Developing a New
Thesaurus for Art and Architecture.
Library Trends, vol.38, no.4,
p.644-658 (1990)
- [44] Petersen, Toni. "History of the AAT".
Art and Architecture Thesaurus. 2nd
ed., Vol.1, New York, Oxford University
Press, 1994, p.3-26.
- [45] Gibson, Salah Scott. アメリカのアー
ト・ライブラリー21世紀に向かって. 水
谷長志訳. アート・ドキュメンテーショ
ン研究. No.1, p.70-78 (1992)
- [46] "AAT Editorial Principles and Convention".
Art and Architecture Thesaurus 2nd
ed., Vol. 1, New York, Oxford University
Press, 1994, p.27-45
- [47] Barnet, Patricia. "Chapter 2 Indexing
with the AAT". Guide to Indexing and
Cataloging with the Art and Architecture
Thesaurus. New York, Oxford University
Press, 1994, p.33-40
- [48] Weinberg, Bella Hass. In-Depth Book
Reviw. Journal of the American Society
for Information Science, Vol.46, No.2,
p.152-160 (1995)
- [49] Art and Architecture Thesaurus 2nd
ed., Vol.1-5, New York, Oxford University
Press, 1994.
- [50] 野添篤毅. "7.4 シソーラス" 図書館情
報学ハンドブック. 図書館情報学ハンド
ブック編集委員会編. 東京, 丸善, 1988,
p.629-650
- [51] Thesaurus of ERIC Descriptors, 11th
ed. Oryx Press, 1987, 588p.